

# 青春スクロール

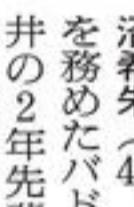
母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

学生時代から何度も中国を訪れ、中国語が堪能な武井



多摩高校から法曹界に進んだ卒業生も少なくない。お茶やワインを飲みながら憲法を学ぶ活動で注目される弁護士の武井由起子（46、1986年卒）は2年までバドミントン部、その後は生物部とロック音楽



## 多摩高校 ④

樂の「おたまじやくし」を掛け持ちした。「中学時代、パーソナルトレーナーとして、多摩高では先生から『可愛いね』と言われ、力が抜けた。誰もが自由には責任が伴うことを学び、節度を持って羽目を外していた」。36歳で商社をやめてロースクールに入り、現在は横浜を中心に活躍する。

東京に拠点を置く弁護士の鯉沼希朱（49、84年卒）は、部長を務めたバドミントン部では武井の2年先輩だった。「朝、毎日放課後と、とにかく練習し

た」。努力は実り、3年の県大会は個人・団体戦とも優勝して高校総体に出場。県のスポーツ交流友好訪問団員として、中国・遼寧省も訪問した。「多摩高でも自信や責任感、粘り強さが身につきました」

かかった。「こんなで、どうやつて外の世界に出て行けばいいんだろう」と将来を考えるきっかけになつた」と懐かしむ。

京都地裁所長の並木正男（61、71年卒）は金沢地家裁、京都家裁に続き、所長は3ヵ所目にかかる。多摩高では1年で放送部、2年でアマチュア無線部に所属。「教室で合宿し、ラジオ作りなどをしたのが楽しかった」。

妹と2人の弟も含め「4人きょうだい全員」が多摩高卒という鯉沼



多くの企業で顧問弁護士を務める古賀政治（58、75年卒）は元陸上部員。今もフルマラソンを3時間9分で走る。3年の高校総体予選ではスタート直後にアキレス腱を切り、ゴールした

# 「自由は責任伴う」校風が法曹生む

る。努力は実り、3年の高校総体予選ではスタート直後にアキレス腱を切り、ゴールした

山が好きになり、今も時間があれば山歩きを楽しむ。

元大阪高裁長官で、内閣府情報公開・個人情報保護審査会会長の大野市太郎（68、65年卒）はテニス部員だった。ラケットにガットを張るのもコート整備も、自分たちでやつた。「自分で考えて自分でやる、という自